

## 原告の意見陳述（1）

奥州光吉

私は、原告の奥州光吉と申します。成瀬ダムのかんがい事業の中流部で米作りをしている農家です。

成瀬ダムの名目は一応「多目的ダム」になっていますが、有効貯水量の40%近くをかんがい用水が占め、実質的には「農業用水の確保」を目的としたダムです。下流の平鹿平野で水が不足しているとして、現在の毎秒15トンの水を2倍の30トン取水できるように計画されました。先行的水利権といってダムはできていないのに多く取水できるようになりました。

なぜ2倍もの水が必要なのでしょう？ 減反政策が始まってから久しくなりますが、私のところでも減反率は34%を超えています。すなわち田んぼ3枚のうち1枚は稲を植えていないのです。そこでは、大豆やソバ、スイカなどの作物が植えられていますが、そうした作物に用水路の水をかけている農家はいません。水を必要とする田んぼが3分の2になっているのに、2倍の水が必要だとは、田んぼ目いっぱいコメを作っていた時代に比べれば、単位面積当たり実に3倍の水を確保するということになります。どうみても過大な水増しだと言わざるをえません。

このような大量の水を使う時期は限られています。代かきから田植えの時期で、この地域では5月上旬から中旬の約2週間です。従来は「番水制」といって水を利用する期間を決めて順番に水をかけたり、譲り合いながらやってきていました。そうした工夫や経験をやめてどの農家も自由に好きな時に好きなだけ水をかけられるためのダムだということでしょう。しかし、考えてみてください。盆や正月の合計2週間のために大勢の帰省客があるからといって「もう一本高速道路を造れ」と言うのでしょうか？ 高速道路なら、時々刻々渋滞情報を流すなどして混雑期の渋滞解消に努めています。同じことがなぜこの情報化時代に水の供給に関しても出来ないのでしょうか？

多くの農家は、この成瀬ダム事業について「馬鹿臭いなあ」と言っています。無駄な金の使い方だ「もったいない」と思っているのです。全体の1割にも満たない不足地域の解消のために、ダムに頼らない方法があります。足りないと言いながら排水路には満々と水が流れているのです。その水を再利用するならばるかに少ない費用で改善できるでしょう。そうした代案を検討しないでダムしかないというのは暴論です。農水省は、事業の費用対効果を1.09とはじき出しています。机上の空論と言わねばなりません。農業経営は一層厳しくなっ

おり、ダムができて2倍の水が来たからといってそれだけの効果があるのなら誰も苦勞はしないのです。農家が誰も信じていない所以です。

成瀬ダム建設地には、赤滝という名勝があり、その脇に赤滝神社が祀られています。昔、日照りの時には下流の農民が列をなして雨乞い詣でをしたと伝えられています。豊作を願い、水を大切にしてきた先人たちの思いと営み。まさしく命の水だったに違いありません。そのような由緒ある滝と神社をダムの底に沈めていいのでしょうか？ 成瀬ダムは本来守られるべきはずだった森林生態系保護地域に深く喰い込む形で建設されます。地球温暖化が叫ばれるなか、私たちは、「雨乞い神社」を湖底に沈め、それに続く森と清流を破壊して、先人たちの思いと営みに報いようというのでしょうか。

もうひとつの治水目的についていえば、成瀬ダムは成瀬川の最奥地に建設されるという地理的な制約から、その治水効果は極めて限定的です。集水面積は玉川ダムの4分の1で、なおかつダムの下流には奥羽山系などから流れ込む幾筋もの溪流や沢があります。それらの水も集めない限り、下流の治水には役に立ちません。

私たちが憂慮するのは、貴重な自然が破壊されることばかりではありません。秋田県の財政は深刻な状況です。秋田県の借金総額は今や1兆2600億円を超え、一世帯当たりでいえば315万円に相当します。その原因は、無責任な公共投資にあったことは明白です。大王製紙進出で使うことになっていた玉川ダムの水は今も活用されることなく日本海に垂れ流されています。また、現在建設中の森吉山ダムは当初計画の910億円の2倍近い1750億円に膨れ上がる見込みです。

岩手・宮城内陸地震では、成瀬ダム建設地を通る国道342号線も大きな被害を受けました。栗駒山は、海底火山が隆起してできた活火山で、周辺は非常に地盤がもろく水が浸み込みやすい構造になっています。成瀬川上流部も、大きな断層にできた川で、複雑な地質のうえに地滑りの起きやすい場所です。そこに巨大ダムを造ることは、将来に大きな不安を残します。困難な地盤に今日の土木技術とお金で何としてでもダムを造ってしまうのでしょうか。現実に工事の核心部分、採石となる「原石山」の場所が変更になるとのことです。総事業費1530億円、秋田県の負担金は260億円と言われていますが、これを大幅に超過する可能性があります。無駄な事業で貴重な自然を破壊し、国と地方の財政をますます困窮に追い込む、これは明らかに法律違反ではないのですか！ この巨大事業を中止し、その負担金を今の経済状況の中で困難になっている県民生活の改善や秋田県の希望ある施策に有効に使うべきです。

## 原告の意見陳述（２）

古関和子

私は、湯沢市の旧稲川町に住み、精神の医療機関で仕事をしている一人暮らしの看護師です。町を流れる皆瀬川を通して皆瀬ダムと河川の汚濁の関係を調べ、子ども達と水遊びした清流を取り戻したいと、強い願いを抑え切れずにいた矢先のこと、隣りの成瀬川に巨大ダムを造る計画が進行しているのを知りました。それは、白神山地に匹敵するといわれる貴重な自然を破壊するばかりか、孫子の代まで借金を押し付ける事業計画でした。

さらにダム問題に関わっていった個人的な理由は、まだ幼いころ父がダムの現場で働きながら、その展望と現地の息吹をいつもいつも手紙に託してよこしていたからです。ダムはまさに父の人生そのものであれば、マイナスイメージを知りたくなかったのが本音です。しかし、全国いいえ世界的にも自然破壊に連なるダム事業の検証見直しが叫ばれ、脱ダムが衆知されていくのは時間の問題となりました。微力ながらふるさと秋田の自然と清流を守りたく、この裁判の原告となった次第です。

さて、私たちの町では誰でも人工的にせき止められた川は必ず汚濁の原因となることを知っています。洪水時のダム放流水が長期にわたって濁ることばかりか、ダム周囲の森から沢づたいに流れ込む落ち葉が腐葉土となりヘドロ化して堆積し、それがドロドロとダム湖に溶け入り、川の汚染と富栄養化が進んでいきます。清流に棲む魚が奇形になったり、鮎が育てなくなったり、川の水を引いていた池の鯉が酸欠のためにみんな死んでしまったり、川は瀕死の状態です（それらの写真を提示）。

多かれ少なかれ堆砂問題やヘドロによる富栄養化は、ダムの宿命だとのこと。そうであれば、濁りにくいと紹介されている成瀬ダムも避けようがないでしょう。また県民のふるさと、母なる雄物川の源流をダム事業でヘドロ化していいのでしょうか。堆砂の問題は、その排砂の影響によって大きな漁業問題となった黒部川が象徴的です。秋田県の魚ハタハタの生育を守るためにも、将来に禍根を残さぬ判断が求められています。いま、老朽化した皆瀬ダムと皆瀬川がその警鐘を鳴らしているような気がしてなりません。

もう一点、利水事業のなかでの上水道計画について異議を述べさせていただきます。成瀬ダムに取水を予定し水利権を獲得のため、厳しい予算のなかから

支出している自治体は湯沢市、横手市、大仙市です。昔から天然の水瓶とうらやましがられた横手盆地とその周辺地域であればダムに依存しなければならぬほどの水不足とは、とても信じられません。そこで、合併を期に市民となった湯沢市の水道計画を調べてみて、啞然となりました。

高齢化と人口減少が進み、市街地の産業も軒並みその火が消えかかっている現在、一日最大給水量が 1.3 倍と膨れ上がっています。その理由の一つに、現在進行中の下水道計画の需要があげられていました。しかし、すでに下水道の完備している秋田市と比較してみても、随分多いことがわかります。資料の年度が違いますので一概に言えませんが、秋田市一人一日平均給水量は 397 リットルに対し、湯沢氏は 524 リットルです。さらに施設の老朽化による漏水が 25% 以上もあるやに言われております。まさに、ダム計画に参入するための水増し計画のようです。東北の灘といわれる湯沢の酒の命は、豊富で水質の良い水にありました。それがダムの汚れた水に依存されるならば、地場産業の自殺行為となってしまいかねません。浄水化のための設備投資やメンテナンスコストが水道料金に付加されれば、市民の生活が圧迫されるのは必至です。

以上の身近な点から巨大ダムは秋田県民に必要不可欠なものか、再検証の必要性を訴えさせていただきました。最後に一年前の栗駒山を中心とした大地震や山塊崩落には、自然に負担をかけ続けたことが関わっているといわれています。私たちの会でもダム問題に取り組んだ当初から地質学的な不安を訴えてきました。栗駒山周辺に永眠る犠牲者たちのためにも、これ以上の自然破壊を止めていくことが県民共通のねがいではないでしょうか。